

守護神・弁財天がまつられた弁天城

弁天城

保元の乱・平治の乱で源氏をおさえて平氏の全盛時代を築き、栄華を極めた平清盛、その清盛公が、知将で知られる子の重衡（清盛の五男）に命じて、現在の弁天城の要害の地に城を築かせたそうである。その城内に、守護神として弁財天がまつられたことから「弁天城」と呼ばれました。「弁天城」の地名は、この「弁天城」を略したものだと思われています。現在でも城があったと思われる付近には、弁財天をまつるほこらがあります。また、上野にも弁財天をまつる厳島神社があり、近年まで雨ごいの習わしが残っていました。弁天城の時代と神社の起源はどちらが古いか定かではありませんが、何らかの関係があるとも考えられています。

弓の名手、射方

伊方

昔からこの村の人は、とても弓が上手だったといわれています。毎年、射手五人を国に出して、その役目を果たしていました。特に養老四年（七二〇年）に八幡宇佐宮が、華（南九州から西九州一帯の一族）を征伐したときには、とても大きな功績を立てたと伝えられています。当時の人たちはこの弓の名手、射手のことを「射方」と呼んでいたそうです。このことから、「射方」が地名として「伊方」になったと言われています。また、この「伊方」という地名を別の角度から見ると、「イカ（鰻）・タ（廻）」、大昔に彦山川や白髮川に濁があつたことから「イ（接頭語）・カタ（濁または方）」になったと考えることもできます。

畑か、豪族の氏か、地形か

畑

「畑」の語源については定説がありませんが、一般的に考えれば農作物を耕す「畑」からくるものと思われています。一方で、古代豪族の氏を語源とする説や動詞「ハタク」で叩、砕、叩き落すの語幹から「崩壊地形」を示す可能性もあります。また、奥まった所や端「ハ（端）・タ（廻）」や縁、そば、わきなどが転じて「周囲」や「外側」を表す意味も考えられます。福智町の畑の場合、谷が大きく入り込んだ地形から見ると「端」または「周囲」や「外側」が当てはまりそうです。お隣の直方市の「畑」は「端」が語源だと考えられており、山腹から裾を含んでいて、このこと似た地形になっています。いずれにしても、この「畑」の地名由来については、今後の研究に期待することになります。

貴船神社（赤池由来）

景行天皇の時代以前からある古宮で、地方の十二貴船社の宗社として名をはせた宮だと伝えられています。現在は若八幡宮（祭神：仁徳天皇）と合祀されています。この地形から阿賀池のモデルになった池は、貴船神社から北側に見下るした所にあると考えられています。



「小高い丘の上にある社

福智山頂（上野由来）

町のシンボル、福智山の山頂には、たくさんの巨岩や奇岩があります。そのなかに稲穂岩・豊碑・聖之塔など、伝承をもつ岩がいくつもあり、日本武尊の伝承とかかわりがあるか定かではありませんが「国見石」もあります。また、上野の小高い丘の上にも「国見ヶ岩（孟蘭坊）」があります。



「岩肌が露出する山頂

飯土井神社（神崎由来）

かつて日王山にあった日王神社から天照大神を永正4年（1507）に奉遷した神崎地区の産土神にあたる神社です。そのときのご神託により、神社の東北に井戸を掘ると清水がわき出し、土は赤飯のようだったといわれます。そのことから、村人はここを飯土井神社と呼ぶようになりました。



「昭和62年に改築した神社

南木菅原神社（南木由来）

延喜元年（901）に菅原道真公が太宰府に赴く途中、この神社で休息し、南の松の木を見て「生い茂る一本の松をここにみておなつかしき東風そふく」と詠じ、ご染筆の短冊を社人に下されたといわれます。これにより、天仁2年（1109）に神殿を再建し、天満宮と改称しました。



「境内にある菅公懸掛石

弁天城跡（弁城由来）

田川郡誌に「清盛は其子重衡に命じて弁城の要害地に築城させ、弁天城と名づけ、長野新九郎を据え置きたり、当時平家は其の勢力の及ぶ所、守護神弁財天を奉仕する慣わしあり、上弁城の地にも築上と共に奉祀されたり。之より城の名を弁天城と呼び地名も亦弁城となれり」とあります。



「城跡付近の弁財天の祠

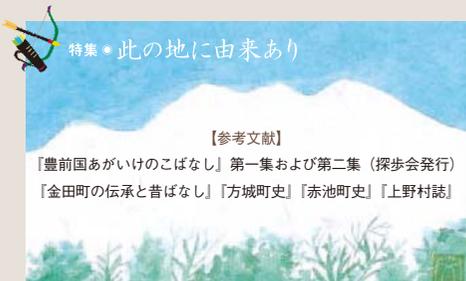
地名が示す古の姿

議源繪、ガランケ鼻、六郎太郎、馬騎、化粧田、石走り…今は廃止された旧金田町の小字である。それらの名は三百九十を数えた。旧赤池・方城町の小字はまだ残っているが、今後廃止の方向にあるという。これも時代の流れ、土地整理が煩雑・非効率になり、細かすぎて不具合を生じることから、全国的に小字は消えていく運命にある。しかし、地名をなくすことは実に惜しいこと。遠い祖先の風習や、遺跡、地形、産業、社会のあり方などを多くの地名が物語っているからだ。例えば、今はなき旧金田町の小字名をみてみると、無田・昆布形・古腕・勝負ヶ迫は地形を示し、四十田・古賞畑・石場は産業に関している。動物物にまつわるのは菜葉木・柿木田・蟹ヶ迫・忍鶴。交通では人見・内職・橋本。馬場・杖田は武技を練った場所、十居別当・木別当は豪族の屋敷にかかわりがある。そのほか宗教、人名などなど、地名が往事の姿を示す事柄は驚くほど多い。

特集で町内の地名をひもといてみたが、編集の頼みの綱は旧町の『町史（誌）』や伝承をまとめた冊子だった。地名は昔つけられたままのものもあれば、合併前の頭文字をとるなど、移り変わるものもある。今回それぞれ由来にうなずきながら、記し、残し、伝えることの大切さを感じた。古の姿を知る手がかりとなる地名、その意味を知ること、わたしたちの故郷にまた一歩近づける気がした。

今に伝わる地名由来のなごり

福智



特集 ● 此の地に由来あり

【参考文献】

『豊前国あいがいのこぼなし』第一集および第二集（探歩会発行）
『金田町の伝承と昔ばなし』『方城町史』『赤池町史』『上野村誌』